２－２	
主題	介護実習の外国人留学生が不安やとまどいを感じない実習環境作り
副題	文化や考え方の違いを理解する

キーワード1	実習生	キーワード2	なし	研究(実践)期間	２４ヶ月

法人名・事業所名	社福）浴風会　特別養護老人ホーム南陽園・第二南陽園・第三南陽園
発表者（職種）	志眞由紀江（介護職員）、北濱貴子（介護職員）
共同研究(実践)者	山口春美（介護職員）、他３名

電　話	０３－３３３４－２１５９	ＦＡＸ	０３－３３３４－１７４５

事業所紹介	杉並区高井戸にある浴風会は、東京ドームの 1.3 個分の敷地の広さで、四季折々の草木が豊富でご利用者や近隣の方々の散歩コースとしても利用されています。その敷地内にある特別養護老人ホームの三施設は、各施設の特徴を活かしつつ各部署が連携を図りながら、ご利用者の支援と地域貢献活動に積極的に取り組んでいます。

《1． 研究(実践)前の状況と課題》

浴風会の基本理念の一つに「地域との協働と社会貢献」がある。私たち三つの特別養護老人ホーム（以下、「三特養」という。）には、それぞれに地域連携担当ケアワーカーが配置され、地域活動の受け入れ窓口となり、ボランティア活動の支援や近隣小学校の福祉体験講師等、地域貢献活動の担い手をしている。また、三特養では年間延べ１０５校からの実習生を受け入れており、介護福祉士実習指導者として実習生の受け入れ担当も担っている。

最近、介護福祉士養成校は減少しつつあるが、介護を学ぼうとする外国人留学生（以下、「留学生」という。）は増えており、最近の受け入れ実習生の約半数は留学生である。

三特養では、共通の実習生受け入れマニュアルを活用しながら、有意義な実習期間が送れるよう各施設の特徴を活かして実習指導を行ってきた。しかし、留学生の実習生が年々増えてきたことで、ご利用者・職員とのコミュニケーション方法に戸惑いを感じている留学生や実習への取り組み方の違いに職員が戸惑うことがあった。そのことから、実習環境や実習指導など、留学生受け入れ体制の見直しが必要ではないかとの課題が挙がった。

《2． 研究（実践）の目的ならびに仮説》

1 目的

・留学生が戸惑いや不安なく実習を行うことで、学校での学びを深められるとともに福祉現場での遣り甲斐や楽しさを感じてもらう

・職員の言葉や文化の違いから生じる戸惑い等を少しでも解消し、個別性を活かした指導をしていく

2 仮説

・実例から留学生の立場になって実習環境・指導方法を検討することで、戸惑いや不安を解消させていくことができるのではないか

・養成校教員と事前に留学生の母国文化や言葉の壁・実習に対しての不安を確認しておくことで

無断転載・複製を禁じます。

実習指導に活かせるのではないか

《3．具体的な取り組みの内容》

①指導する側・指導を受ける側の理解の違い。言葉の曖昧さから起こった実例
曖昧な表現での指導では誤解を招くので、認識の違いをお互いに理解し実習フロアには具体的な表現で指導を行う事を徹底して取り組んだ。

②養成校と連携し留学生の母国文化の違いを知り実習フロアで共有した実例
養成校と留学生と三者で情報交換を行い、文化の相違に対して出来る事、出来ないことを明確にすることで養成校と施設との指導に誤差が生じないように取り組んだ。

③その他、複数の実例を基に取り組んだ。

《4．取り組みの結果》

・実例を通して共通している問題点は、具体的な表現での指導方法の必要性であった。養成校との連携を密にとりながら実習マニュアルを留学生が理解しやすい表現に変更し、その結果、指導者と留学生との間での認識の相違がなくなった。
・また、養成校からの情報を実習フロアと共有し指導に活かせるようにしたことで、担当職員も留学生に積極的に関わる姿勢が増えた。
・さらに、実習を通じて挫折しそうになった実習生にも、多角的なアプローチや実習プログラムを柔軟に対応することで実習目標を達成することができた。
・留学生との関わりに注目してきたが、コロナ禍で人との関わりが少なかった日本人実習生にも実は共通の課題が存在していることがわかった。

《5．考察、まとめ》

近年の外国籍の実習生が増加していく中で、新たに生じた課題点を踏まえて、実習マニュアルの見直しや実習環境を整えたことで、留学生個々の特長を理解し実習生に合わせた実習を展開できるようになった。改めて留学生個々に合わせた実習の進め方が重要だと分かり、これは留学生に限らず日本人の学生にも同様な対応が必要ある事を再認識できた。

そして、介護人材確保に向けてつい即戦力となる中途採用者を優先とされがちになるが、実習生を受け入れる私たち担当者は、何より実習を通して人との関わりが楽しいことや専門職としての学びを深められるよう指導していくことにも重点を置くことも責務であると実感する。

《6．倫理的配慮に関する事項》

本研究（実践）発表を行うにあたり、ご本人に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

特になし

《8．提案と発信》

「福祉現場での遣り甲斐や楽しさ」を、次世代を担う学生たちに確実に伝えていくためにも、施設から養成校に出向く機会を増やし、学生との繋がりを広げていくことが必要だと考える。

無断転載・複製を禁じます。